

Nagoya Urban Institute News Letter

ニュースレター

地域に根づく
まちづくり



有松絞りの祭り紋展示

名古屋都市センター

2014.3 vol.99

[特集]

受け継ぐ、育てる、発信する……

地域に根づく市民の自主的なまちづくり



2013年8月に修復開館した、揚輝荘のシンボル聴松閣



揚輝荘で行われた音楽イベント

多彩な取り組みで名古屋を元気に

自分たちのまちを自分たちで快適にしていこうとする地域住民による“まちづくり”が、名古屋の各地で行われています。地域の人々の共感を得ながら着実に連携を広げているもの、歴史的な考察と確かなビジョンに裏付けられたもの、地域資源を活かした創意豊かなものなど、取り組みの内容も多彩です。それらの中から地域に深く根付き、名古屋都市センターのまちづくり支援事業とも関わりのある4つの団体の活動を取り上げてみました。



有松の町並みで行われる絞りの祭り紋のパレード



野崎白菜を育てる中川区の農場

Contents

[特集] 受け継ぐ、育てる、発信する……

地域に根づく市民の自主的なまちづくり	1~3
PERSON	4
まちづくり助成団体紹介	5
名古屋都市センター研究成果	6~7
まちづくり来ぶり	8
なごやのまち今昔	9
活動報告	10~11
お知らせ	12



有松の絞りの実演

【特集】 地域に根付くまちづくり



揚輝荘の北庭園



揚輝荘で行われた国際交流イベント

地域のランドマークとして 広域展開めざす

■揚輝荘の会

「揚輝荘は、建築的、歴史文化的価値の宝庫であり、国際交流とまちづくりの拠点でもあります」。こう語るのは「揚輝荘の会」の事務局長・佐藤允孝さんです。名古屋市千種区の覚王山高台にある「揚輝荘」は、大正から昭和初期にかけ、松坂屋の初代社長・伊藤次郎左衛門祐民氏が築いた別邸です。最盛期には、1万坪の敷地に広がる庭園と30数棟の建造物を舞台に、皇族、政治家、実業家、文化人、アジア人留学生などが交流を繰り広げました。戦時の空襲などにより建物の多くが失われたものの、主要な部分は今も往時の姿を残しています。

この揚輝荘を地域の貴重な財産として保全し、市民のために活用しようと2003年、松坂屋OB、建築家、学識経験者、郷土史愛好家などを中心に約40人のメンバーで立ち上げたのが「揚輝荘の会」です。当初は任意団体でしたが、2006年にNPO法人となりました。2007年に揚輝荘は名古屋市に寄付され、2008年には聴松閣、伴華楼など5棟の建造物が名古屋市の指定有形文化財とされました。同会は現在、名古屋市の「指定管理者」として、公有民営の形で揚輝荘の管理運営にあっています。会員も約160人に増えました。

活動の内容は多岐にわたります。建造物や庭園・緑地の研究と保全。茶会、音楽会、セミナーなど市民参加型のイベント。アジアとの交流の歴史を活かした国際交流。情報発信、展示、ガイドなどを通じたまちづくりと生涯学習の取り組み……などです。「今後はこれまでの地域にとどまらず、名古屋あるいは愛知のランドマークとして発想と活動の幅を広げていきたい。他の施設とも積極的に連携し、さらに広域的な情報の収集・発信と運営をめざしていきます」と佐藤さんは話しています。

絞り産業と町並みの魅力を 伝えるために

■有松あないびとの会

「有松は、もともと町並み保存の先駆的地域なのですよ」。「有松あないびとの会」の会長・成田治さんは、そう言って胸を張ります。

名古屋市緑区有松町は、有松絞りと江戸時代に建てられた豪壮な商家の町並みで知られています。愛知県や名古屋市の指定文化財になっている建物も多く、歴史と日本建築の美しさを伝える景観は名古屋市の町並み保存指定第1号に輝きました。また長野県の「妻籠を愛する会」、奈良県の「今井町を保存する会」とともに「有松まちづくりの会」が、1974年に「全国町並み保存連盟」を設立しています。

絞り産業や町並みに興味を持ってこの地を訪れる人々に、その歴史や魅力を伝えようと「有松まちづくりの会」を母体に2003年、約40人

「“まちづくりびと”養成講座」を 卒業し地域で活躍

■ NPO 法人プラスまちづくり

名古屋都市センターは、自らの地域のまちづくりに主体的に取り組む人材の育成を目的とした「“まちづくりびと”養成講座」を開いています。2005年に開講したこの講座に当初から参加し、学びをまちづくりにつなげてみよう仲間5人が中心となり2007年に任意団体を設立。2011年にNPO法人として新たなスタートを切ったのが「NPO法人プラスまちづくり」です。現在は建築や土木の専門家、農林業やカラーに興味のある人、主婦など多彩な顔ぶれの16人が名古屋および周辺地域を中心に活動しています。

この団体の特徴は、活動の場を固定しないところにあります。各地で行われているまちづくりに、その特性に適した会員が参加。これまでの活動を通し身に着けた経験や、多角的な視点を活かしながら運営を支援していくのです。「会員はまちづくりを通じて学び、そこで得たノウハウを新たなまちづくりに活かします」と話すのは同会代表の三田祐子さん。そこでは学びと支援が対等で双方向、しかも参加の仕方はフレキシブルな独自のまちづくり団体です。

の会員でスタートしたのが「有松あないびとの会」です。有松・鳴海絞会館を活動の拠点とし、通常1人の会員が10～20人の観光客を受け持ち、1時間強のガイドを行います。

おそろいの絞りの衣装を身にまとい、例年6月に開催し2日間で約8万人が訪れる「有松絞りまつり」の見物客や、観光バスなどでやってくる団体客を案内します。大学生が有松の歴史、町並み、建物などを卒業論文のテーマに選び、研究のために訪れることもあります。その場合1人の会員が1人の学生を案内することもあります。

会員自身も研修を怠りません。月2回勉強会を行い、有松の歴史などをまとめた会報『有松よもやま話』を1年に1回発行。すでに16号を数えています。「少しでも多くの人に有松の歴史や魅力を伝えたい。その一心ですね」と、成田さん。会員の並々ならぬ情熱が、これらの活動を支えているようです。

白菜の原点「野崎白菜」を地域ブランドに

■中川区ブランド野菜製品開発研究会

日本の食卓でおなじみの白菜は、明治8年に中国から伝わりました。国内で栽培を始めたものの、当初は土壌の違いなどから葉が開いてしまい、うまく育ちませんでした。「でも中川区で農場を営んでいた野崎徳四郎氏が、長年の試行錯誤の結果、明治半ばに頭部を丸く包む結球白菜の開発に成功したのです」。力説するのは「中川区ブランド野菜製品開発研究会」の田中鉦男さん。「野崎白菜が日本の白菜の原点」だといいます。

その後も品種改良を重ねた野崎白菜は肉厚で柔らかく、さらにおいしくなりましたが、日持ちしにくいことなどから生産農家はわずかです。この野崎白菜の歴史と魅力を見直し、中川区の地域ブランドとして育て発信しようと2010年に発足した産学共同プロジェクトが「中川区ブランド野菜製品開発研究会」です。農家、飲食店、企業、大学、高校、行政など幅広いメンバーが参加しています。



絞りの衣装を着て、小学生に有松の町並みをガイドする「あないびと」



野崎白菜のゆるキャラ「はくちゃん」と野崎白菜を使った新メニュー

活動には大きく分けて二つの柱があります。一つは、野崎白菜を中心とする中川ブランド野菜の支援です。例えば白菜を使った串カツ、パン、スイーツなどオリジナル商品を開発し店舗で販売。それらを食べ歩くスタンプラリー「はくちゃん祭り」などを開催し、地産地消を促進しています。もう一つは、野崎白菜を街おこしの起爆剤とする取り組み。他のイベントとの積極的な連携や、野崎白菜をアレンジしたゆるキャラ「はくちゃん」の開発などです。この「はくちゃん」をさまざまなイベント、メディア、グッズなどに登場させ、地域起こしに活かそうとしています。

「二つの柱の相乗効果によって、100年を超す伝統野菜を新しいパワーとして再生させたい。それを中川ブランド野菜の振興と地域活性化に結び付けたいのです」。田中さんは、そう力を込めました。

まちがよくなることと人の成長は連動

まちづくりは自分たちの暮らしをよくするためにおこなうもので、特別なものではありません。昔から多様な形で存在します。公害問題に対する市民運動はその典型でしょう。江戸時代の百姓一揆もおなじです。ただ高度成長期以降の特徴はあります。大規模再開発で環境や風景やコミュニティが壊され、住民がそれらの負荷に敏感になっています。後追いですが、行政が、まちづくりの取り組みに助成を出すようになってきたという追い風もあります。

そうした中で、まちづくりに関し二つの課題を挙げましょう。一つは組織の維持にこだわり過ぎないことです。

名古屋大学大学院 環境学研究所 准教授
名古屋都市センターまちづくり基金運用委員会 委員長

にしざわやすひこ
西沢泰彦さん

まちづくりは立派な大義名分や他人のためではなく、自分たちのためにやることです。その原点が実感できなくなった組織を無理して維持する必要はありません。もう一つは、出来る活動をすることです。助成を受けると、自分たちの能力を超えたことをやろうと背伸びしがちです。無理な活動は長続きしません。

まちづくりは、いろんな人や考え方との出会いの場でもあります。それは自分を成長させてくれる場でもあります。多様なまちづくり活動が続けば、まちは活性化します。人の成長とまちがよくなることは連動しています。

